

史学委員会 IUHPST 分科会（第 25 期・第 5 回）
議事要旨

日 時：2021 年 12 月 19 日(日)15:00～17:00

場所：オンライン開催

出席者：木本忠昭〈委員長〉、岡田光宏、河村豊、橋本毅彦、兵藤友博、溝口元

報告事項

以下の報告があった。

- ・ 学術会議改革に関連する「提言」活動の見直しに関する本分科会の会長申し入れを行った。
- ・ 国際団体加盟組織の活動調査報告書に対するヒアリングはなかった。
- ・ 12 月 27 日：国際ユニオン関係懇談会開催する。

審議事項

（1）前回議事要旨の確認

前回議事要旨を確認した。

（2）来年度の国際会議派遣候補者の選定

来年度の国際会議派遣候補者として橋本毅彦委員（DHST 第一副会長）を選出した。

（3）本分科会の今後の方針

本分科会の今後の活動方針について検討した。その際、本分科会の過去の国際学術団体加盟組織（分科会）の活動調査書を確認し、また現在の学術会議改革の中で提起されている分科会の再編や政府、CSTI 等からの学術会議の「国際活動の見直し」の狙い等の分析的議論が交わされ、DHST と DLMPST への対応がきちんとなされる組織の在り方を、状況を見ながら今後も検討していくこととした。

（4）学術会議の改革案の現状について

学術会議の改革案の現状について、下記のような経過報告と検討を行った

- ①提言等意思表出法の改定案は、分科会からの「提言」にハードルを設ける、分会、若手アカデミー、委員会は基本的には「見解」ととどめ、「勧告」は学術会議の勧告とする内容となっている。このような組織階層による「意見表出のランク付け」は科学者組織として科学的か（上部組織の意見はより高度か）といういい検討が意見表出方法の変更提案以来議論されてきた。

②これについて、上記報告のように、11月15日当分科会から委員長名で「分科会による提言活動の見直しについての要望」を会長宛に行った。（事務担当者から会長に見てもらうとの連絡があった）

③12月総会において改革案が決定されたと言われているが、意見表出の「見解」や「勧告」等には、分科会や若手アカデミー、部や委員会などの階層的区別がなくされ、意見表出手続きが精緻に規定されとの情報がある。連携会員レベルには、内容の情報共有は事前に話されていない。決定案については、今後も検討することとする。

(5) CIPSH 対応

CIPSH（国際哲学人文学会議）への対応について次の①報告をも参考にしながら②のように決定した。

① CIPSH 会議報告(岡田)

12月に開催されたCIPSH(哲学人文学会議)臨時総会と国際CONFERENCE(南デンマーク大学ホストのハイブリット形式会議)に参加の岡田委員から同会議の報告がなされた。（下記参考資料参照）

② CIPSH への対応

CIPSH との関係強化に関する申入れ書の扱いについて、IUHPSTへの本分科会加盟状況への影響や、CIPSH 組織原則から日本学術会議は単独ではCIPSHには加盟できないことなどの諸状況について検討し、基本的に人文系の国際連携が日本学術会議では手薄であることの打開のためには、関係強化の方策をはかるべきであることを具申すべきであることを確認し、申し入れ書を提出することとした。

(参考資料) CIPSH 哲学人文学会議) 臨時総会と国際 CONFERENCE
(岡田委員作成 2021 年 12 月 19 日 IUHPST 分科会資料)

CIPSH 第 35 回総会(GA)及び Conference 報告(岡田光弘) Local Host:デンマーク・南デンマーク大学(オーデンセ市) 2020 年 12 月開催予定だったが、パンデミックにより 2021 年 6 月に延期した後、さらに 2021 年 12 月に再延期されていた。今回はパンデミックの状況下でハイブリッド形式開催 となった。2021 年 12 月 13 日-14 日 CHIPSH 第 35 回総会 2021 年 12 月 15 日-16 日 Conference (日本からは藤原聖子先生(東京大学)が IAHR(Secretary General)派遣代表および Conference Keynote として、また、岡田光弘(慶應義塾大学)が総会ゲストおよび Conference Round-Table Speaker として出席した。)

総会の主な議題 各種 Reports Report of the Committee on CIPSH Chairs 2021 では、DLMPST-Secretary General Benedikt Löwe 教授が選ばれたことの報告があった。

CIPSH BY-LAWS Planning of the Executive Committee meeting in 2022 次回 CIPSH 会議について 2022 年 12 月開催を予定していた CIPSH 東京会議は、パンデミックの現状を考慮して、2023 年に開催することとなった。時期は、8 月(下旬)を目指すこととなった。その他(Projects など)

12 月 15 日-16 日 Conference (CIPSH Board と開催校側とで共同組織委員会を組織して開催された。) 全体テーマ”Sustainability, Social Relevance and the Humanities Opportunity and Challenges” Keynotes Prof. Anders Engberg-Pedersen Prof. Sverker Sörlin Prof. Tyrus Miller Prof. Satoko Fujiwara Prof. Helle Porsdam The Conference includes five roundtables, each introduced by invited speakers and followed by an open debate. 1. Understanding the Humanities 2. The Humanities and Health - and 'Health Humanities'. 3. The Humanities and the SDGs. 4. The Humanities, Technology and AI - and 'Techhumanities'. 5. The Humanities, Museums, and Art. Special Session The Global History of Humankind Project —— 以下、参考 Organising & Steering Committee - Luiz Oosterbeek, President of CIPSH - Hsiung Ping-Chen, Secretary General of CIPSH - Tim Jensen, Deputy Secretary General of CIPSH and Senior Lecturer at the University of Southern Denmark - Simon Moberg Torp, Dean, Faculty of Humanities, University of Southern Denmark - Lars G. Binderup, Vice-Dean, Faculty of Humanities, University of Southern Denmark - Marianne Sandvei, PA to the Dean, Faculty

of Humanities, University of Southern Denmark 参考:GA 開会挨拶 CIPSH Deputy-Secretary General, Prof. Tim Jensen: Words of Welcome CIPSH Secretary-General, Prof. Hsiung Ping-Chen: Words of Welcome UNESCO Assistant Director-General for the Social and Human Sciences Dr. Gabriela Ramos: Opening Remarks CIPSH President Prof. Luiz Oosterbeek: Opening Talk 参考: Social Events: アンデルセン美術館(館長対応)、オーデンセ市長訪問など ——以上——

<資料 2>

CIPSH との連携強化についての要望書

2021. 年

12 月 24 日

日本学術会議会長

梶田隆章 殿

史学委員会 IUHPST 分科会委員長 木本

忠昭

日本学術会議は、現在、改革の検討をしており、その課題の一つに国際活動の改善があげられていると伺っています。国際活動の改善の一環としては、CIPSH との提携活動の改善が必要と考えますので、以下、本件についてご検討頂きますようお願いいたします。

CIPSH (The International Council for Philosophy and Human Sciences: 国際哲学人文科学会議) は 1949 年に UNESCO のもとで、人文科学領域の代表国際組織として設立されて以来、国際科学会議 (ISCU) が自然科学領域の代表的組織、国際社会科学評議会 (ISSC) が社会科学領域の代表的組織、CIPSH が人文諸科学の代表的組織という役割を担ってきました。周知のように ISCU と ISSC は 2017 年に合併、ISC となったので、今日では、ISC が自然系工学系諸科学及び社会科学系を、CIPSH が人文諸科学を代表する国際組織となっています。

日本学術会議は、現在、ISC とは緊密な関係を持っていますが、CIPSH とは公式には組織的関係を持っておらず、人文関係を主体とする CIPSH の活動内容が、日本国内に全体的に滞りなく伝わってきているとは言いがたい状況にあります。もちろん、学術会議がこれまで人文領域の国際組織 CIPSH への認識がなかったわけではなく、例えば、『日本学術会議 25 年史』には、国際学術団体として「国際哲学人文科学協議会 CIPSH」27 団体をあげています。また、2011 年には CIPSH-ISSC 総会・Conference 名古屋会議で日本学術会議会長が挨拶をしており、2017 年 CIPSH - UNESCO 世界人文科学 Conference (ベルギー) では日本学術会

議井野瀬副会長（当時）が基調講演を行っています。

しかし、CIPSH への加盟形態は ISC とは異なり、加入メンバー・シップが国単位ではなく、地域連携体や学問分野連携体となっているため、加盟や直接の連携がしにくい面があったものと思われ、現在ではいわば「間接的」な連携を持つのみになっています。

間接的な連携としては、第一部史学委員会の「IUHPST 分科会」の加盟する二つの国際組織、IUHPST/DHST と IUHPST/DLMPST がそれぞれ CIPSH に加盟していることから、IUHPST 分科会を通じて世界の人文諸科学分野の活動に連携できています。同分科会は IUHPST/DLMPST を通じての「ユネスコ世界論理デー」の設定、2022 年の CIPSH Conference 準備などにもかかわっています。

しかし、IUHPST 分科会の活動は、科学史、技術史、科学基礎論等限られた分野での提携にとどまり、広く人文系諸分野をカバーするものではないことは論を待ちません。これと同じように、人類学や地理学でも、CIPSH に加盟する国際組織に参加することによって CIPSH との「間接的」な連携が持たれています。

もう一つの「間接的」な係りは、(人文系) 学会を介しての関係に見られます。日本の人文系学会が、例えば宗教史学や文化人類学のように、当該分野の国際組織 IAHR や WAU に加盟、これらの国際組織が CIPSH のメンバーであることから国内学会が CIPSH と連携し、この CIPSH との関係をもつ学会から、日本学術会議の会員なり連携会員が選ばれることにより、日本学術会議が CIPSH と関係をもつ場合です。現在、宗教史学関係の IAHR から CIPSH 評議委員に選出された日本人研究者が、連携会員（元会員）として日本学術会議で連携的な活動を精力的になされているのは、この例です。

残念ながら、日本学術会議は組織的なつながりとして、こうした国際組織 CIPSH で重要な機能を担う日本人研究者がいても、その研究者が会員や連携会員でなくなれば、学術会議と CIPSH との関係は消失しかねません。日本学術会議の組織として、こうした人的な要因に依存する関係を、組織的に安定する関係に高める必要があります。CIPSH が対象とする人文科学分野の国内学会は数百にのぼり、そのほとんどが独自の人文科学分野の学会誌を定期刊行しています。また人文科学系学科をもつ国内研究教育機関が多いことも周知のことです。

いうまでもなく、今日の科学技術・イノベーション基本法では、人文科学のみに係る科学技術も法の対象となり、自然科学と人文科学との相互の関わり合いは重要な課題として提起されていますが、これも国際的な連携を無視してはなしえないことだと思われます。

こうした多くの分野での人文系哲学系諸科学の国際活動の拡充を考えると、日本学術会議と CIPSH の果たす役割は大きいものがあり、両者の連携を強める必要があることを提言するものです。現段階は、CIPSH 関係会議への日本学術会

議からの派遣も、日本学術会議非加盟国への「派遣」という扱いだと承知していますが、これも十分な扱いであるか検討すべきであると思います。

人文科学教育は高等教育機関のみならず中等・初等教育にとっても重要であり、研究教育の国際機関 CIPSH との連携には大きな成果が期待できます。

まさに日本学術会議の国際活動の見直しが提起されている今日、CIPSH との連携関係を個人依存的関係でなく学術会議の組織として関わる方策の考案に取り組むことを強く望みます。

ただ、CIPSH は前述のように、加盟形態が国ごとの直接加盟方式ではないので、直接日本学術会議が加盟する方法はないと思われます。当面考えられる方法は、次のようなものであるかもしれません。

- ・新たに、アジア地域で複数の学術団体と国際的な人文科学系連携をつくり、加盟する方法
- ・日本学術会議の参加するアジア学術会議の人文科学系分野部門を組織し、加盟する方法
- ・中国科学院の形態、すなわち国内人文系諸学協会による「アカデミー」連合体を形成する方法 ただし、この形式は CIPSH にあっては特異であると思われるので、選択肢の一つとしては現実的ではないようにおもわれます。
- ・日本学術会議内に CIPSH 担当部門（者）または CIPSH 関連分野連絡会などをおいて連携活動を行う方法、たとえば CIPSH 分科会の設置など。

これらのうち、最初の二つの方法は、組織運営の負担が大きく、三番目の方法は、CIPSH の本来の組織原則から外れているとみられるので、いずれも現実的な可能性は小さいと思料します。当面、4 番目の方法がもっとも実現可能だと思われます。

いずれにせよ、国際活動の充実の課題として、今後の学術会議の改革と関連すると思われるので、検討させていただくことを要望する次第であります。

最後に、CIPSH との連携活動をいかに構築するかを検討する場合においては、先にふれましたように、必ずしも日本学術会議としての組織的活動ではないにもかかわらず、CIPSH との連携活動を担い、しかも重要な役割を果たしてこれてきた方たちがおられますが、これらの方たちとも意見交換を十分に行いながら検討を進めていかれるよう強く望むものであります。

<資料 3>

2022 年ユネスコ世界論理デー記念 Aspects of Logic Study 会合の報告

(2022 年 1 月 20 日)

IUHPST 分科会委員 岡田光弘

ユネスコ世界論理デー(UNESCO World Logic Day 1月14日)を記念する CIPSH 登録行事として、1月15日に「Aspects of Logic」会合を遠隔会議形式で開催した。IUHPST 分科会委員が組織・企画委員会共同代表として企画と運営に関わり、IUHPST 分科会と連携する形で開催した。

日時：2022年1月15日 13時-16時(日本時間)

目的：論理研究・教育のいくつかの側面に焦点を当て、問題点を共有し討論することを目的とした。

「Aspects of Logic Study」会合プログラム

1部：論理の諸根本問題：ゲストへのインタビュー

2部：論理とリーズニングにおける「不合意」研究成果中間報告

3部：論理の学際的アプローチ

特別セッション： 高等教育と論理学

概要：

第1部では、論理学の役割、論理学の基本問題の現代的評価（1950年代日本発の「竹内外史予想」(*)の現代的意義など）、論理学と哲学の関係について、ゲスト Jean-Yves Girard 氏(CNRS)に考えを聞いた。Gilles Dowek 氏 (INRIA, ENS Paris-Saclay) は、デジタルエシクス研究に対する論理学の重要性を、DLMPST-科学基礎論学会共催シンポジウム(2021年6月)での議論に言及しながら指摘された。

(*) 本年2022年は竹内予想に関わる Girard 氏の成果発表から50年目に当たる。

第2部「Disagreement in Logic and Reasoning」セッション:フランスの本テーマ研究グループ代表 Pierre Wagner 氏(パリ第1大学科学技術史科学技術哲学研究所 IHPST 所長)による挨拶とテーマ紹介、日本側本テーマ研究グループとその共同研究者による3講演などがあった。論理學史上の論争や自然言語意味論の「不合意」分析例、深層学習推論と論理推論の間のギャップ例などを通じて、論理レベルの不合意と不合意の克服に向けた基礎研究の紹介がなされた。本テーマ研究に参加する若手研究者や大学院生たちの個人研究サブテーマ紹介も行われた。

第3部では非言語レベルで否定や基本論理推論が成り立ち得るかどうかという問題に関わる講演が認知科学者と動物神経科学者によりなされた。(第2部テーマとの関係については今後の検討に残された。)

これに続く特別セッション「高等教育と論理学」では、ゲストの特別講演とそれに続く討論が行われた。学部レベルと研究者育成レベルの両方の論理学教育について検討された。日本の大学教育における論理学科目の取り扱い方やその問題点、海外との比較が講演者から報告された。論理学教育改善のために

必要となる制度面の問題や既存制度の有効利用の可能性（例えば、大学院間単位相互認定制度の利用）なども議論された。異なる分野の論理学教育者や現役大学院生なども含めた討論がなされた。予定終了時刻を延長して討論が進められた。（会合コーディネータから、今後も継続してこのテーマを討論する機会を設定したいことが伝えられた。）

各講演の講演者情報を含むプログラム詳細は次を参照：

https://abelard.flet.keio.ac.jp/seminar/World_Logic_Day_2022/

今回の会議成果に基づいて、第2部テーマのフランス側研究グループとともに、本年前半に次回国際会合を開催する予定である。

組織・企画委員会 (Organizer-Coordinator Team) (アルファベット順)

五十嵐涼介 (東京都立大学)

峯島宏次 (慶應義塾大学)

岡田光弘 (慶應義塾大学、日本学術会議史学委員会 IUHPST 分科会委員としても参加) (共同代表)

岡本賢吾 (東京都立大学) (共同代表)

主催組織 (Host-Organization): 慶應義塾大学 論理と感性のグローバル研究センター

問い合わせ先: logic[at]abelard.flet.keio.ac.jp

<資料4> DHST council statement Ukrainian war

the president, officers and undersigned council members are sending out the following statement with respect to the the ongoing war in Ukraine, with best wishes,
on behalf of the council,

Liesbeth

*The president, officers, and undersigned council members of the Division of the History of Science and Technology (DHST) of the International Union for the History and Philosophy of Science and Technology condemn the ongoing military actions against Ukraine directed by the government of the Russian Federation. Our deepest concern and sympathy go to our Ukrainian colleagues and all the people bearing the grim consequences of this war, and also to colleagues elsewhere who are suffering in silence or risking their lives to speak up. We know that in addition to the unacceptable loss of human life, wars devastate libraries, schools, universities, and all kinds of cultural institutions

that are the material remnants of a people's history and right to education. As an organization that traces its origins to the vision of scholars who experienced first hand the tragedy of two World Wars, the DHST is acutely aware that freedom of education, culture, and research are among the many rights presently being violated. We stand in solidarity with the people of Ukraine and our fellow scholars on both sides who are struggling to maintain their lives, livelihoods, and scholarship.*

Marcos Cueto, Janet Browne, Hasok Chang, Liesbeth De Mol, Thoms Háddad, Takehiko Hashimoto, Xingbo Luo, Jahnavi Phalkey, Maria Rentetzi, Milada Sekyrková, Hamish Spencer